忌避意識とは

どちらも「子や孫に差別を受けさせたくない」という願いは同じなのですが…

A

我々が受けた差別を子どもや孫に差別を受けさせたくない。そんなつらい思いをさせたくない。部落差別がなかったら、そんな思いをしなくてよいのだ。

B

部落差別があることはわかっている。だから、子どもや孫にわざわざそういう土地に住まわせなくてもいいではないか。

◎被差別部落を避けるのは当然ではないかという気持ちになる前提は、実際に部落差別を受けている人がいるという現実があるからです。

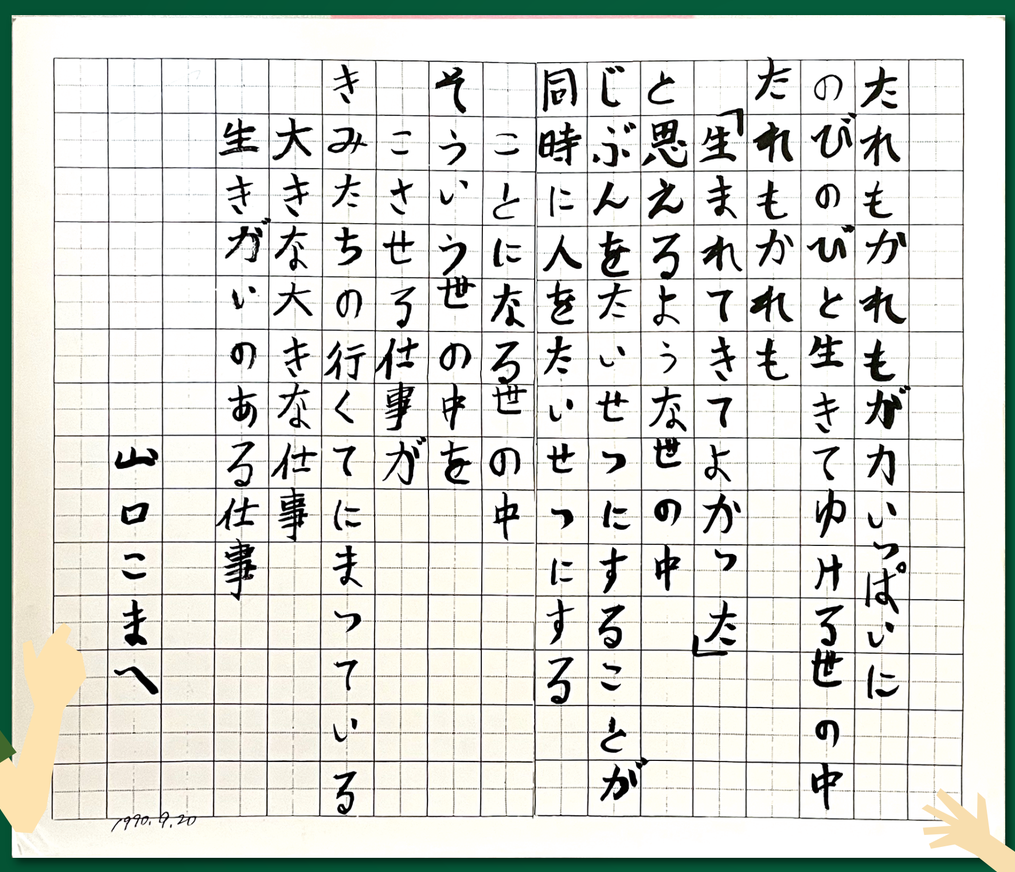
◎部落差別がなかったら、被差別部落出身者であると見なされるということはありません。

◎部落差別がなかったら、「私は、被差別部落に生まれました。」と言っても、「ここが、被差別部落だ。」とわかっても何の不利益も受けることはありません。

◎部落差別がなかったら、「差別を受けるかもしれない」という不安感を抱いたり、怖れたりしながら生活をしなくてもよいのです。

◎忌避意識に基づくBの主張は、差別をなくしたいというAの主張とは異なり、実は差別を温存させ差別に加担するものです。

部落差別のない世の中を願って



これは、識字学級で学んでいた山口こまへさんの作品です。解放教育読本中学生版「にんげん」にのっていた吉野源三郎の文章「いつの日か、かならず———」の一部を、山口さんは思いをこめて書きうつしました。

識字学級は、先生と受講生がいっしょに学びあう教室です。文字を学んでいる受講生が、部落の暮らしや差別の体験を教える先生になることもあります。